第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

印章と貨幣を考えてみよう。メソポタミアの円筒形の印章は、そこに刻まれている図を粘土板のうえに転がして、痕跡を残す。版の一種としていくらでも同じ像を作り出すことのできる、最初の複製技術である。印章はひとつひとつ異なる。その痕跡のもつ価値は、その印章からしか生まれないというところにある。

いっぽう、ある物体が貨幣として機能するには、物理的な質と量が認められるだけでは十分ではない。[1]<u>物体は交換されてはじめて価値をもつ。</u>動物や貝などが通貨として使われる場合でさえ、それは人間の手から別の人間の手へと渡らなければならない。メソポタミアの印章や粘土板、そしてギリシアやローマの貨幣は、イメージの遍在性を考えるうえで重要なヒントを含んでいる。

印章は確かにそこに刻まれているひとつのモチーフを無限に転写することができるが、その持ち主の使用の範囲によって限定される。ふつう印章は、それを転写する人間と一義的に結びついている。形式的には署名と同

じものと見なされているのは現代と変わらない。

それにしても情報化時代になぜ印鑑が使用され続けているのか、不思議といえば不思議である。歴史を知らない外国人のなかには、簡単にコピーすることのできる印鑑が、どうして署名と同格の扱いを受けることができるのか訝（いぶか）しがる人もいるだろう。

形式的に似てはいても、署名と印章は異なる。署名と捺印がセットになってきたことは、歴史的な文書に明らかである。文書は、書字とイメージがセットになって、つまり知的身ぶりに[2]象徴が伴うことによって、オーソライズされてきたのだ。

ギリシアのコインも、その初期には限定された地域で使用されていたと言われる。流通よりも象徴としての機能のほうが強く、鋳造されても特定の場所にとどまるケースもあった。[3]その初期にはまだ印章性を保っていた。

だがコインに刻まれた女神や皇帝の横顔は、やがて広い世界を渡ってゆく。ローマ帝国の初期には、ギリシアのコインが受け継がれて使用されていたが、貨幣に刻まれたイメージは地中海世界へと拡がっていった。今日わたしたちが「マネー」と呼んでいるものの本質は、その過程で備わったものである。

マネーの語源が女神の名モネータにあることはよく知られている。モネータの横顔が[a]ホられたコインもあるところから、「お金の神様」と思われることも多いが、もともとモネータは福や富をもたらす神ではない。ローマのカピトリーノの丘近くにあったモネータの神殿には、度量衡の原器が納められていたと言われる。モネータは［Ａ］の神様だったのである。ある物体が正貨として認められるための核心は、質量の保証にある。モネータの神殿はまた、行政文書の記録を預かる保管庫とも通じていた。物質を計る神は記録を管理する神、すなわち［Ｂ］を測る神だったのである。

ローマ神モネータが計量と記録というふたつの働きを司るのは、そのギリシア名に由来する。それはギリシア神話では、記録の神として知られるムネモシュネである。ムネモシュネは芸術の神々ムーサの母として知られ、西欧の芸術に多様なインスピレーションを与えてきた神であるが、ローマ時代には別の顔を伴って、丘のうえに[b]クンリンしていたことになる。別の顔、すなわち土地の大きさや貨幣の重さを保証し、経済を安定させる神としての顔である。

モネータが度量衡の神であると同時に、記憶の女神であることは、イメージの遍在性を考えるうえで興味深い。[4]記憶が集団的な行為となるとき、わたしたちの社会ではそれを記念と呼ぶ。記念物すなわち「モニュメント」

もまた、ムネモシュネやモネータと語源を同じくする言葉である。ローマのコインはギリシアのそれとは異なる歴史を歩んだが、そこに皇帝の顔をはじめとした帝国の系譜が刻まれている。貨幣は帝国がそのイメージを複製し流通させるための、重要な複製技術となっていった。

　このような女神の来歴が物語るのは、貨幣が価値であると同時に、イメージでもあるということだろう。それが資本となりいわゆるマネーとして地球の隅々に行き渡るのは、それからさらに時代を経てからだが、「資本の増殖」という現象は、すでにこのときに胚胎していたと考えてもよいかもしれない。

　これを貨幣の[5]モネータ性と仮に呼ぶならば、その性格は基本的に今日でも変わらず続いている。それはどの国であっても、通貨のデザインに端的に表れている。通貨のデザインが表すのは権力のイメージであり、国民国家を代表するイメージである。この点で、ＥＵの共通貨幣「ユーロ」のデザイン、特にその紙幣の図案は非常に特異なものであると言える。補助通貨、つまりコインについては加盟国がそれぞれ独自にデザインをしているが、紙幣のほうは共通である。この「共通通貨」の特徴は紙幣にある。

　各国の紙幣には、多くの場合、何らかの意味でその国を「代表する」とされる人の顔が印刷されているが、ユーロの紙幣にはそれがない。顔の代

わりに使われているのは建築物である。ギリシア人もドイツ人もそれがどこかにある建物だと[c]バクゼンと思っているかもしれないが、そうではない。[6]ユーロのデザインは、世界中どこを探しても見つからない、架空の建造物を「顔」にしているのである。

発効してから十年あまりのあいだ、ユーロは幾度かの危機に見舞われてきたが、そのたびに共通通貨の矛盾が指摘されてきた。通貨は共通でも、財政政策はＥＵに加盟する各国に任されており、しかもそれぞれのあいだに深刻な対立が存在するからである。紙幣に描かれる建造物は、何であってもよいというわけではない。常識的には、その価値を保証する建物がそこにあるべきだろう。

共通通貨は歴史上幾度か創設されてきた。経済史でよく知られているのは、フランス、イタリア、ベルギー、スイスが中心となった「ラテン通貨同盟」だろう。一八六五年に発行されたとき、フランスの硬貨にはナポレオン三世の横顔がほられていた。

二十世紀がアメリカの時代だったなら、ＥＵは二十一世紀のローマ帝国を描いていたかもしれない。だが残念ながら、ヨーロッパにモネータの神殿は存在しない。ユーロという通貨には、未だに責任を負える建物がないのである。ユーロは基軸通貨かもしれないが、「顔」をもたないかぎり、

それは永遠に疑似通貨のままかもしれない。そのユーロを破綻の危険にまでさらしているのが、ギリシアやイタリアだという事実を、古代の神々はどう見ているだろうか。

いやそれは神々に失礼というものだろう。言うまでもなく問題はユーロだけのものでないからである。[7]マネーはグローバル資本主義そのものである。マネーの影響から逃れることのできる地域は、事実上存在しない。その遍在性は神々以上のものであり、それに比することのできるのはおそらくイメージだけだろう。人間が生み出したもののなかで資本とイメージほど強大になったものはない。その力、その速度、その自在性はますます増すばかりである。

[8]しかしユーロがどうなろうが、イメージと資本は加速度的にヨーロッパを変えてゆく。一九八九年の冷戦崩壊以前にはヨーロッパにはいろいろな風景があった。東欧では商品広告のいっさいない風景も珍しくなかった。ドライブインのメニューにも、それぞれの土地柄が反映されていた。

だがリスボンからベルリンまで、高速道路だけで行けるようになった今日、窓から見える景色にはどこか似た印象を受ける。あらゆるサービスが「チェーン」となり、同じカラーのホテルやレストランが大陸を覆っている。[9]EUは確かに「単一市場」となったのである。

高速を降りれば、さらに既視感は強まる。都市の中心街へ向かう街道沿いの光景は、看板の文字が違うだけでほとんど同じである。自動車販売、スーパーマーケット、家電の量販店……どこで見たのか思い出せないのは、同じイメージの広告が延々と続くからだ。そして中心街に入り、いちばんの目抜き通りに到着すると、既視感ではなく「すでにそこに来たことがある」という確信に変わってゆく。目抜き通りに建ち並ぶのは国際ブランドのショップであり、ウィンドウの中身は広告でよく知っている商品である。空港のトランジット・ラウンジのような風景。そこは確かに「すでに来たことのある場所」なのである。

　これはモータリゼーションとともに始まった「フランチャイズ化」の究極の姿と言えるかもしれない。[10]サービスとノウハウをパッケージにした経済は、ロゴに代表されるイメージを売ることによって、瞬く間に欧州全体を覆ってしまった。これを「イメージの経済」と呼びたい。現代世界ではイメージの経済が都市を作っていると言ってもいいだろう。

　たとえば世界中どこへ行っても、郊外に造られる住宅地は似ている。それは新興住宅地がフランチャイズ化されたサービスと一体化してデザインされるからだろう。家を買うことは、イメージの経済によって提供されたライフスタイルを買うことと直結するからである。フランチャイズ化され

た都市は次々に自己増殖を続けているから、やがて地球全体がそうなってしまうかもしれない。

　このような事態を支えているのは、言うまでもなくモータリゼーションと並んで現代世界を変えてきたモバイル化という現象である。かつては特定の土地と結びついて［C］していたものが、世界同時に［D］するというモバイル性の究極が実現しているということだ。

（港千尋『芸術回帰論―イメージは世界をつなぐ』による）

問一　傍線部ａ～ｃの片仮名を、漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二　傍線部１「物体は交換されてはじめて価値をもつ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　他のものが持つ可能性を、その物体が無限に代替できるから。
ロ　物体そのものの使用価値は限定的だが、交換価値は無限だから。
ハ　交換されることで、物体が他の物体が持つイメージをも取り込めるから。
ニ　交換されることで、物体が印章とは違った複製性を持つようになるから。

問三　傍線部２「象徴」とあるが、何の「象徴」か。本文の語句を用いて五字以上十字以内で解答欄に記せ。

問四　傍線部３「その初期にはまだ印章性を保っていた」について、次の問いに答えよ。

（Ⅰ）ここで言う「印章性」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　印章が、契約を保証する徴となること。
ロ　印章が、実体を離れてイメージとなること。
ハ　印章が、複製技術と不可分の関係にあること。
ニ　印章が、ある人物と密接な対応関係にあること。

（Ⅱ）「印章性」が領土の拡大と結びついた状態を記述した一文を、本文から三十五字以上四十字以内（句読点を含む）で抜き出して、最初と最後の三字をそれぞれ解答欄に記せ。

問五　空欄［A］と空欄［B］に入る最も適当な語を次のイ～ヘからそれぞれ一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　過去　　ロ　形式　　ハ　尺度　　ニ　時間　　ホ　重量　　ヘ　本質

問六　傍線部４「記憶が集団的な行為となるとき、わたしたちの社会ではそれを記念と呼ぶ」とあるが、筆者がこのような説明を加えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　ギリシアの貨幣は地域限定だったが、ローマの貨幣は世界的に広く用いられたことを示すため。
ロ　貨幣が共通の価値を表すものと認識されることで、自己増殖的に価値を増してゆくことを示すため。
ハ　たとえばローマの皇帝は、帝国という集団を代表することで、世界征服が可能となったことを示すため。
ニ　記憶の女神モネータが一地方においてだけではなく、広く信仰されることで貨幣の価値を支えたことを示すため。

問七　傍線部５「モネータ性」を構成する二つの要素を示す語句を本文から抜き出し、それぞれ解答欄に記入せよ。

問八　傍線部６「ユーロのデザインは、世界中どこを探しても見つからない、架空の建造物を「顔」にしている」とあるが、このことを指摘することで、筆者はどういうことを暗示したかったと思われるか。その説明として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。
イ　ユーロというイメージに頼る通貨が、ヨーロッパとしての本質を奪ったということ。
ロ　貨幣は価値で、通貨はイメージだと言えるが、ユーロは価値よりもイメージが先行しているということ。
ハ　ユーロは理念だけがあって、それを通貨として保証する制度が弱いので、信頼性が十分確保できていないということ。
ニ　ユーロは二十一世紀の帝国を目指していたかもしれないが、古代の建造物のような、帝国を象徴する建造物を持ち得ていないということ。

問九　傍線部７「マネーはグローバル資本主義そのものである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　コントロール不可能だということ。

ロ　加速度的に価値を増していくということ。

ハ　各国の思惑が象徴的に現れるということ。

ニ　全世界を覆っていながらどこにも存在しないということ。

問十　傍線部９「ＥＵは確かに「単一市場」となったのである」という記述は文脈上ある効果を持っている。その表現上の効果をどう呼ぶか。本文にはない漢字二字の言葉を考えて、解答欄に記せ。

問十一　傍線部10「サービスとノウハウをパッケージにした経済は、ロゴに代表されるイメージを売ることによって、瞬く間に欧州全体を覆ってしまった」ことを、筆者は直後で「イメージの経済」と呼んでいる。「イメージの経済」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　理念だけが先行した経済。

ロ　過去の理念を再現しようとした経済。

ハ　さまざまなものがパッケージ化された経済。

ニ　世界を一つのイメージで均質化してしまうような経済。

問十二　空欄 C と空欄 D にはどちらも「へんざい」と読む漢字が入る。それぞれ、楷書で解答欄に記せ。

問十三　筆者は後半部（傍線部8「しかしユーロがどうなろうが」以降）において、何を言おうとしているのか。その趣旨として最も適当なものを次のイ〜ニから一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　ユーロ圏では郊外にブランド化された高級な新興住宅を作り出すなど、経済活動をイメージに変換することに成功している。

ロ　ユーロは通貨として十分安定していないのに、グローバル資本主義がやるべきことだけはやっていて、ヨーロッパの個性を破壊している。

ハ　ユーロによってヨーロッパは均質化され、さらにモータリゼーションの影響で、かつてのヨーロッパのイメージをどこでも見ることができるようになった。

ニ　ユーロ圏としてのヨーロッパは単一のパッケージによって開発するノウハウを持ったために、全世界を支配する帝国のような様相を呈するようになるだろう。

（次ページより解答欄）

問一
a
b
c

問二

問三

問四
（Ⅰ）
（Ⅱ）
〜

問五
A
B

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

C

D

問十三

第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解　解答

問一　a 彫　b 君臨　c 漠然

問二　イ

問三　印章を転写する人間。

問四　（Ⅰ）ニ　（Ⅱ）貨幣は〜った。

問五　A ハ　B イ

問六　ロ

問七
価値
イメージ

問八
ハ

問九
ロ

問十
皮肉

問十一
ニ

問十二
C 偏在
D 遍在

問十三

ロ